

## 1 生活と宇宙の接続

### バレリーナと宇宙飛行士のダンス

ロシアと聞いてイメージするものは何だろうか。重厚なロシア文学、壮麗なオペラやバレエ。厳寒で知られる広漠とした大地。ウオッカやペリメニといった食文化。カトリックやプロテスタントとは異なる発展を遂げた正教会の道のり。あるいは帝政ロシアの皇帝たちや、ソヴィエト連邦による社会主義の壮大な実験に思いを馳せる人もいるだろう。これらすべてが、ロシアの象徴として広く認知されていると言ってよい。

本書が指摘しようとしているのは、宇宙というトピクスもまた、ロシアと切っても切れない関係にあるということである。一九六一年四月十二日、ソ連の宇宙飛行士ユーリー・ガガーリン（一九三四―一九六八）は史上初の有人宇宙飛行に成功し、アメリカとの宇宙開発競争におけるソ連の優位を体現する存在となった。以後、ガガーリンはソ連の英雄となつて世界中を訪問することになる。この有人飛行に先駆けて、ソ連は一九五七年

には史上初の人工衛星であるスプートニク一号を打ち上げていた。スプートニク一号とガガーリンは、今に至るまでソ連の栄光を示す記号として機能している。

これは世界的な事件であり、ソ連の宇宙開発の可能性を決定的に印象づける出来事であった。もつとも、スプートニク一号とガガーリンの偉業という歴史的瞬间のみが重要であったわけではない。それらはいくまでも代表的な事例であり、その後には長い時間をかけて培われてきた宇宙へ向けられたまなざしが潜んでいる。本書では、とりわけ美術の分野を中心としてこのまなざしを拾い上げ、それが二十世紀以降のロシア文化を貫くひとつの軸となつて示していることを示したい。言い換えれば、多種多様な芸術のプリズムを通してロシアが夢見た宇宙の姿をとらえ直してみることが本書のねらいとなる。

宇宙へのまなざしと聞いて、それが芸術文化と何の関わりがあるのかという疑問を抱く人もいるかもしれない。たしかに一見すると、ロケットの打ち上げと制御は純粹に工学的な領域の探求だろう。宇宙飛行士にしても、その資格に芸術的な素養が含まれているわけではもちろんない。だが同時に、宇宙飛行という事業が無数のイメージによつて支えられていることも事実である。ガガーリンが宇宙飛行から帰還した後にはSF的な傾向をもつ映画や文学が多数現れたことは言うまでもないが、技術が宇宙進出を可能にする以前から、人々は天空をまなざし、星辰を読み解くことで自分たちの生活の指針としてきた。種々の文化に刻まれてきたこの天空へのまなざしこそ、後の宇宙開発の源泉とみなすべきものだろう。宇宙進出は表面的には技術的な達成だが、その背景にある文化的な土壌を無視することはできない。

もうひとつ重要な点として、宇宙開発それ自体が無数の表象に彩られた事業だということが挙げられる。

興味深い事例がひとつある。ロシアにおいて宇宙開発を担ってきたロスコスモスが、二〇一九年四月にYouTubeにとある動画をアップロードした。<sup>1)</sup>「宇宙とバレエ」というタイトルが付けられているこの動画は、

モスクワ郊外にあるガガーリン宇宙飛行士訓練センターで撮影された映像をもとに、ロケットの打ち上げシーンや軌道上の宇宙飛行士たちの姿を繋ぎ合わせたものになっている。

動画は、宇宙飛行士が遠心加速器に乗り込むシーンから始まる。遠心加速機とは、宇宙で体験することになる様々な重力環境を回転によって疑似的に作り出す装置である。宇宙飛行士たちは、この回転装置の試練を潜り抜けなければ空へと旅立つことができない。この装置に乗り込むや否やというタイミングで、ロシアを代表する作曲家であるチャイコフスキーの《くるみ割り人形》が一瞬だけ流れ、カメラは遠心加速器のそばで回転するバレリーナの姿をとらえる。すぐさま遠心加速器も回転を始め、バレリーナと宇宙飛行士の回転運動がシンクロする。回転の後に続くのは、飛翔。男性のバレエダンサーが軽やかにジャンプを披露すると、発射場では、打ち上げを待つロケットを背にして一羽の鳥が羽ばたく。いよいよ炎に包まれながら発射されるロケットの映像が、男性ダンサーを支えにしてより高く飛び上がるバレリーナの姿と重ね合わせられながら流れていく。ロケットに乗る宇宙飛行士とバレリーナが、今度は飛翔という行為を通して一体化していくイメージが展開されるのだ。打ち上げ後には《くるみ割り人形》が再び流れ出し、実際の宇宙船内での宇宙飛行士たちの遊泳と訓練センターで撮影されたバレリーナの舞踊が、あたかも同じ船内にいるかのように映し出される。最後にはバレエ学校の子供たちが訓練センターに集合し、宇宙飛行士がひとりの女兒を担ぎ上げて動画は終わる。

荒唐無稽にも見える宇宙とバレエの並置は、宇宙進出プロジェクトを芸術が彩るという側面のみならず、運動としての両者の類縁性を開示していると言える。垂直方向の飛翔に関しては言うまでもなく、バレリーナの回転と遠心加速器の回転が惑星の自転公転、そして軌道上を巡る衛星の動きを想起させることで、ここでは人間と宇宙の力学がシームレスに繋ぎ合わせられている。これはほんの一例に過ぎないが、宇宙に対するまなざしは、絶えず無数の文化的表象と結びつきながら育まれてきたのである。

二〇二〇年にはチャイコフスキーの名が、アエロフロート社で新たに採用されたエアバスA350機に冠された。同様に、二〇一九年にはモスクワのシエレメチエヴォ空港にロシア最高の詩人プーシキンの名が、そしてドモジエドヴォ空港には同じく詩人かつ科学者であり、金星に大気が存在することを発見したロモノソフの名が冠されている。このように、ロシア文化の精髓を飛行プロジェクトと関連づけようとする姿勢は一貫したものとなっている。その栄光は文字通り機体や空港へと転写され、人々の生を包み込んでいるのだ。

### 切手の中の宇宙

これまで見てきた事例は、ロシアが飛行のイメージを戦略的に打ち出してきたことを示唆しているが、当然ながらこの試みは近年になって唐突に着手されたものではない。宇宙飛行は当初から、生活を彩る無数のイメージによって支えられながら進行したプロジェクトだった。たとえば同時代の表象として一見する価値があるのは切手だろう。スプートニク一号の打ち上げが成功した一九五七年以降には、宇宙を描いた切手が大量に作成されていくことになる。切手に表れたイメージが時代のすべてを物語るわけではないものの、宇宙のイメージを一般に浸透させた媒体として切手は見逃せない。いくつかの切手を実際に見てみよう。

一九五〇年代後半、つまり有人飛行に成功する以前の段階では、切手に宇宙飛行士は登場していない。主に描かれているのはロケットや、宇宙飛行の父と呼ばれるコンスタンチン・ツイオルコフスキー（二八五七—一九三五）の肖像である。スプートニク一号が打ち上げられた一九五七年とガガーリンが有人宇宙飛行を成功させた一九六一年は、現在に至るまで記念すべき年号として語り継がれているが、スプートニク一号の打ち上げ自体もまた、ツイオルコフスキーの生誕百周年を記念して行われた事業だった。それゆえツイオルコフスキーの肖像が描かれるのは当然とすら言えるが、一九五七年から一九五八年の切手においては隕石の落下という過